4つの マテリアリティ



資源循環

プラスチックは、「可塑性」「軽量性」「分解されない」等の特色から様々な製品に使用され、私たちの生活に必要不可欠なものとなっています。しかし、自然環境では、小さくはなるものの分解されず自然界に長く残り続け、最終的には、直接あるいは河川を通じて海洋へ流出し、「プラスチックごみによる海洋汚染の深刻化」「海の生態系への影響」「人体への影響」等、数々の被害が明らかになってきたことにより、海洋プラスチックが大きな問題となっています。

2018年カナダで開催されたG7では「海洋プラスチック憲章」が採択されました。この憲章の採択に影響を受け、日本では2020年7月からプラスチック製のレジ袋の有料化が義務化されました。

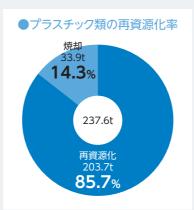
しかしながら、毎年800万トン以上のプラスチックごみが海へ流れ込んでおり、半数近くが容器として使用されいるため、海洋プラスチック問題は、プラスチック使用量の削減、代替への転換といった根本的な対策が必要となります。また、2015年の国連サミットで採択された「持続可能な開発のための2030アジェンダ」のターゲット14.1において「2025年までに、海洋ごみや富栄養化を含む、特に陸上活動による汚染など、あらゆる種類の海洋汚染を防止し、大幅に削減する」と海洋ごみに関する削減目標が設定されました。

このような状況を受けて、当社グループのサステナビリティに関する取組みのマテリアリティの一つとして「資源循環」を特定しました。当社の創立100周年である2047年を到達点とした目指す姿として「環境負荷を低減するために、石油から新たにつくられるプラスチックや、適切に管理されていない森林由来の紙資源を使用しない流通システムを構築する」を設定しました。また、2030年目標として、「物流資材における代替プラスチックへの移行とプラスチック類の再資源化率100%」および「すべての自社ブランド商品におけるサステナビリティへの配慮」を設定しました。加藤産業を含む国内グループ会社を対象としています。

0

再資源化

当社の物流センターで排出される段ボール等の 古紙類やストレッチフィルム等の資源プラスチック の再資源化を推進しています。段ボール等の古 紙類は100%再資源化しています。資源プラスチックに関しては、再資源化が可能は業者に変更を 進め、100%再資源化を目指しています。



0

自社ブランド商品への配慮

すべての自社ブランド商品は、 資源循環への配慮として「プラス チック容器への環境配慮」に取組ん でいます。

また、食品ロス削減への配慮として、「缶詰商品の賞味期限の年月 表示」にも取組んでいます。

	総商品数	配慮済数	実施率
プラスチック容器への 環境配慮	331	90	27.2%
缶詰商品の年月表示	61	54	88.5%









写真は一例です。

クローズドリサイクル

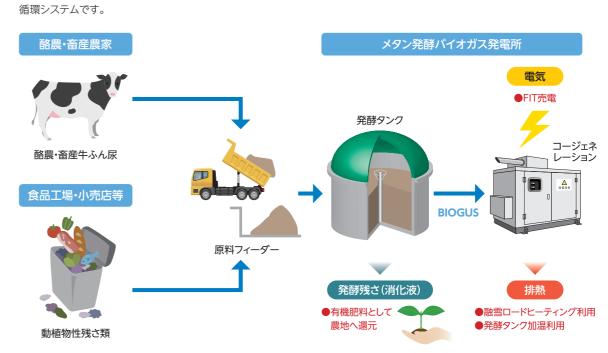
当社の物流センターから排出している段ボール等の紙類を、現状は古紙業者に買い取っていただいていますが、これからは「サプライチェーンの可視化」「古紙の安定的一元回収」「段ボール価格の安定化」を目指し、製紙メーカーおよび段ボールメーカーと連携し、古紙類を当社の自社ブランド商品の包装材として使用する「クローズドリサイクル」の取組みを進めていきます。



✓ メタン発酵発電活用によるリサイクル

当社グループ会社の和歌山産業㈱では、山形県より認証された「メタン発酵発電活用によるリサイクルシステム」に事業主体として参加しています。

循環資源として回収した牛ふん尿、動植物性残さ、汚泥等を発酵することにより発生したバイオガスで発電を行うとともに、 発電により生じた排熱を融雪システムとして利用し、メタン発酵の過程で生じた発酵残さは有機肥料として再利用する資源 循環システムです。



15 | CSR Report 2023 | 16